みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

イヌイト文化伝統の装飾について：極北4600年の「美術史」序説

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-05-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: スチュアート, ヘンリ メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00006003

齋藤玲子編『カナダ先住民芸術の歴史的展開と現代的課題』
国立民族学博物館調査報告　131:79-102(2015)

イヌイト文化伝統の装飾について
── 極北4600年の「美術史」序説 ──

スチュアート　ヘンリ
放送大学

1　まえおき

イヌイトの祖先が北東アジアからグリーンランドにかけての極北のツンドラ地帯に住みついてからの4600年の間に，イヌイトは北極海に面する沿岸地帯，海上に浮かぶ島嶼，内陸などのさまざまな環境に適応してきた。それぞれの地域の環境に応じた社会と文化は，細部こそ少しずつ異なっているが，基本的な適応様子に共通した項目 ── 毛皮服，海獣・陸獣の狩猟，漁撈，道具形式など ── が認められる。

過去のイヌイトが作ったものに施してきたさまざまな装飾は，現代のイヌイト・アートに応用され，引きつがれている。数千年にわたっておこなわれてきた，生活資源を求めて季節的に居住地を移動する生活は，1950年代に本格化した定住政策により終わりを告げたが，各々の地域集団のアイデンティティを表徴する種々の歴史的な装飾モチーフが現代のイヌイト社会に継承されている。

極北地帯に分布するイヌイトは，およそ4600年前から狩猟道具，儀礼用具，あるいは日常什器にさまざまな装飾文様を描いたり，刻み込んだりしてきた。ここで留意しなければならないのが，装飾はただ単なる審美的なものではなく，イヌイトの世界観と密接な関係をもっていることである（スチュアート 2009; Ray 1977: 3–8）。

イヌイトが道具などに施してきた装飾，すなわち「美術（アート）」伝統を把握するための第一段階としてこの小論では，16世紀以前の装飾遺物を概観して，現代イヌイト・アートの序説として位置づける。具体的な資料としては，道具や儀礼用具に施されている装飾を中心に考察を進める。数千年前からつづく「イヌイト文化伝統」で知られている装飾モチーフの歴史を概観して，現代のイヌイト・アートに引きつがれている基礎的な情報を提供する意図である。

なお，次の点に注意されたい。「イヌイト」という表記が民族語イヌクティトゥトの発音にもっとも近いので，本論では「イヌイット」ではなく，「イヌイト」に統一する。また，本文の各文化期の年代は，おおよその年代である。

2　極北地帯の文化的変遷

チュコト半島からグリーンランドにかけて，一年を通して生活の基盤を極北のツンド

ラ地帯におく人びとの名称について，日本語では「イヌイト」が一般的である。しかし，言語において大きな違いのある南西部アラスカからチュコト半島にかけて分布するユッピク（Yu おいて大）と，北西アラスカからグリーンランドまで分布するイヌイトの２つの言語集団との間には，文化と社会的な相違がある。厳密に言えば，この２つのグループを「イヌイト・ユッピク」と呼ぶべきである（スチュアート 1993）が，本論では，民族誌に記録されている諸文化をさすときには一般的に通用する「イヌイト」をもちい，4600年前から現代にかけての歴史全体を「イヌイト文化伝統」とする。

イヌイト文化伝統の歴史を語るとき，もう一つ注意すべきことがある。それは，ベーリング海峡周辺に出現した，現代のイヌイトの遺伝的，文化的な祖先であるチューレ文化（Thule tradition：西暦1000〜1500年）の集団は，人類学ではネオ・エスキモー，もしくは単にイヌイトと名づけられ，それ以前，つまり1000年より前の諸集団はパレオ・エスキモーと呼ばれる。パレオ・エスキモー文化と，ネオ・エスキモーのチューレ文化以降の担い手との間には，遺伝的な関係はないとされるが，あったとしてもその関係はきわめて希薄であった。

ただし，2000年前の西部極北圏のオールド・ベーリング・シーおよびオクヴィク文化以降をネオ・エスキモーとする見解もある（たとえばAckerman 1984: 108；McCullough 1989: 1–3など）が，ここではチューレ文化以降をネオ・エスキモーとする。

さらに，最近のミトコンドリアDNAの研究では，パレオ・エスキモーには２つのグループがあったことが明らかになっている。いずれにしても，ネオ・エスキモー（イヌイト）文化に駆逐されたのか，両グループのパレオ・エスキモー文化の担い手は現代のイヌイトに遺伝情報を残していない可能性が大きい。両パレオ・エスキモー集団の間には環境が相似する極北のツンドラ地帯があるので，生業活動と物質文化の共通点は多い。しかし，パレオ・エスキモーには２つの遺伝集団があり，どのパレオ・エスキモー集団もネオ・エスキモーの担い手とは，形質の異なる集団であるとされる（Gilbert et al. 2008; Lambert & Huynen 2010; Rasmussen et al. 2010）。

極北地帯の文化的な特徴を基準に考えた場合，パレオ・エスキモー文化は北西カナダのマッケンジー（Mackenzie）川以西とそれ以東の地域に分かれ，ネオ・エスキモー文化はチュコト半島からグリーンランドまで広がっていた汎極北の文化である。前述のとおり，北部アラスカではイヌイト，南西アラスカからチュコト半島にかけて，ユッピクという，言語系統の異なる２つのネオ・エスキモー集団が存在していた。極北の人類学研究の習いを踏襲して，マッケンジー川を境に北西カナダとアラスカが構成する西部極北圏と，マッケンジー川流域からグリーンランドまでの東部極北圏に分けて論を進めることにする。それぞれの地域の考古学的な詳細については，デュモン（1982），Dumond（1984），バーチ（1991），マッギー（1982）を参照されたい。

イヌイトの文化史は4600年以上にわたる時間的な変遷と，チュコト半島からグリーン

ランドにまで広がる地域的な変化のために，一概にイヌイト文化伝統のモチーフやスタイルというものを設定することは困難である。とはいえ，各時代と地域との間に断絶が必ずしもあるのではなく，数千年前から現代まで継承されている側面を認めることもできる。

本論では，チューレ文化期より前の諸文化をパレオ・エスキモー文化とし，チューレ文化以降はネオ・エスキモー（現代イヌイト）文化とするが，用語の矛盾があることを承知の上，4600年にわたる全史を指す場合，イヌイト文化伝統とする。

イヌイト文化は，17〜18世紀には欧米人との接触はあったものの，独自の生活様式は基本的にさほど影響されなかったようである。欧米人との接触が密になってくる19世紀から20世紀初頭にかけて，イヌイト文化の基本的なモチーフやスタイルはそれほど変わらなかったが，捕鯨船の乗組員や交易者の意をくんだ作品が多くなった。そして，第二次世界大戦後，とくに1950年代に入ってから，美術市場を意識した作品が多く作られるようになった。

イヌイト文化伝統の歴史と文化全般については，岸上（2005，2007），バーチ（1991）や Damas 編（1984）を参照されたい。

3　装飾について

装飾とは，器物がその機能をはたすために最低必要である機能的な部分以外の飾り，あるいは身体に施される文様を指していう。考古学的に知られている「飾り」は，当時の人びとにとっては，道具の機能を果たすために必要なものであった可能性が強い。たとえば，銛頭にきざまれている文様は狩猟儀礼と係わり，その文様いかんによって豊猟か不猟かが決まると考えたとき，その装飾には器物が機能を果たすための役割があったことを示唆する資料がある（たとえば，Blodgett 1978: 158；Spencer 1959: 338–339；McGhee 1996: 154–171；Nelson 1900: 322–323；Rasmussen 1931: 165–166など）。ただし，装飾をめぐる議論は研究をすすめるための便宜的かつエティックなものであり，必ずしも当時の人びとの考え方や精神を正確に反映していると限らないことを断わっておく。

3.1　西部極北圏

チューレ文化以前は，チュコト半島から北西カナダを南北に流れるマッケンジー川までの西部極北圏には，大きくわけて３つの地域的な文化伝統があった。一つは北アラスカ地域であり，２つ目はベーリング海峡周辺地域であり，３つ目は南西アラスカ地域である。しかし，紀元後1000年ころからいずれの地方もチューレ文化一色に取って代わられ，地域的な特色が薄れていった。

3.1.1 北アラスカ

北アラスカでは，パレオ・エスキモー文化の古い段階に相当する，3000～2500年前のチョリス（Choris）文化に由来する考古資料が少ない。二本の平行する刻線文様や人物の顔の丸彫りなどが報告されている。人物の顔の口から耳のあたりまで平行する二本の刻線が刻まれているが，これは入れ墨を表わしていると解釈される（図１）。

チョリス文化に次ぐノートン（Norton: 2500～1000年前）文化では，装飾品の量が多くなり，用途は不明であるが、全面的に装飾を施されている遺物が出土している（図２）。また，ラブレット（labret）という下唇に開けた穴に填める装身具が知られ（Anderson 1984: 86；Giddings 1973: 210–212），ノートン文化期には黒玉（硬質黒炭）などで作られたものがある（図03）。この他に，平行する浅い刻線の間に三角形のえぐりを入れたものや，相対する三角形文様，両端がとがっている溝状文様などのある遺物が知られている。この時期の人物像はアイボリー[1)]や木製で，のっぺらぼうの顔に何の文様も刻まれていない。足は荒削りされているままで，腕は肩のところに小さな突起があるのみである（図04）。このような人形は再び後述のチューレ文化に登場することになるが，腕の表現を省略するのは西部極北圏全体の各パレオ・エスキモー文化期に共通する特徴である（Giddings 1973: 146；McGhee 1976: 206）。

その異様さと鬼気せまる雰囲気で知られるイピウタク（Ipiutak: 2000～1200年前）文化の装飾品の多くは墓から検出されている。ほかの文化とは違って，イピウタク文化の装飾品には非日常的と思われる用具が多く，鎖状品（図05），転環（swivel）など，シャーマンが使用した可能性のある道具，用途不明な螺旋状の透かし彫りもおそらく精神生活と深く係わっていたと思われる（図06）。これらのものは例外なく副葬品として出土する。なお，このような複雑な

図１　チョリス：人物像
（Giddings 1973: 211）

図２　ノートン：用途不明の装飾品
（Giddings 1967: 188）

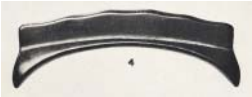

図３　ノートン：ラブレット
（Giddings 1964: Pl.39）

図４　ノートン：人物像
（Giddings 1964: Pl.37）

図５　イピウタク：鎖状品
（Collins 1973: 28）

透かし彫りは鉄器をつかって彫られたのではないかと研究者は考えている（McCartney 1980）。

墓に埋葬されている遺体の頭部に，複雑な刻線文様がきざまれ，口に歯と唇の形を彫りこんだアイボリー製デス・マスク（図07）や，眼孔にアイボリーや軟玉をはめたもの（図08）が出土している。

動物像や人物像は，写実的ではなく，想像上の怪物を連想させるセイウチ（の胎児？図09），アザラシ（図10）やアビを模したもの，そして頭は人間，胴体はアザラシの「アザラシ人間」などがある（図11）。文様の要素は，ほぼ同時期にセント・ローレンス島に栄えたオールド・ベーリング・シー（Old Bering Sea: OBS と略記）文化やオクヴィク（Okvik）文化に似ているが，スタイルや組み合わせはイピウタク文化独特なものである。

以上のようなものの他に，たとえば，かえりが反対に向いている石鏃（矢尻）や，矢柄の途中に鎖状の透かし彫りのあるものがある。これらをみても，イピウタク文化の人びとの造形の異様さと非日常への執念が如実に示されている（図12）（Giddings 1961: 171; 1973: 11–12; Larsen & Rainey 1948; McGhee 1976: 207）。

図 6　イピウタク：儀礼具
（Wardwell 1986: 119）

図 7　イピウタク：仮面
（Collins 1973: 23）

図 8　イピウタク：仮面
（Giddings 1973: 119）

チューレ文化（ネオ・エスキモー文化）

チューレ文化の原型は，1000～1200年前にベーリング海峡周辺に芽生え，1000年前にチュコト半島，アラスカ，カナダ，グリーンランドの極北地帯全域に波及した。この時期の装飾品については東部極北圏の項で後述する。急速にグリーンランドまで広がったチューレ文化は，およそ500年前に同時に起きた寒冷化とヨーロッパ人の進出という２つの要因によって，民族誌に記録されている現代につづくイヌイト文化に展開していった。

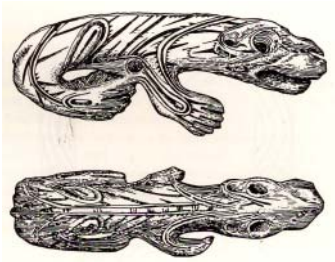

図 9　イピウタク：セイウチ
（Bandi 1969: 112）

図10　イピウタク：クマ、アザラシ
（Taylor/Swinton 1967: 5）

3.1.2 ベーリング海峡周辺

ベーリング海峡に臨むアラスカの北西沿岸と，セント・ローレンス（Saint Lawrence）島，ダイオミード（Diomede）諸島，チュコト半島の北東沿岸では，初期のパレオ・エスキモー文化であまり行なわれなかった海獣などの海洋食料資源を効果的に利用する銛などの専用道具が発達した文化伝統がある。それは，セント・ローレンス島とダイオミード諸島，チュコト半島で確認されているオクヴィク（Okvik：2500～2000年前）文化とオールド・ベーリング・シー（Old Bering Sea：2200～1400年前）文化，プヌク（Punuk: 1200～600年前）文化である。なお，この地域の考古学的文化は年代が重なり合っているので，ここで記した年代は研究者によって見解が異なる。

アラスカの北部沿岸帯の一部とチュコト半島に分布するオールド・ベーリング・シー文化の装飾は，文様が左右対称になっているパネル構造に整理されている（図13）。また，オクヴィク文化に比べて装飾の空間が計画的に設けられている。それまで少なかった点線文が多く，突起のある立体観が強調されている。オールド・ベーリング・シー文化の段階にも鉄の彫刻刀を使用したと推定され，円形文が増えている 。「遮光器」（snow goggles）とも（図14）報告されている骨製品は，目の穴が開いていないので，前述したイピウタク文化の死者の目にかぶせるようなものであるとも考えられる。しかし，目の穴が開いているものもある（図15）ので，図14に示したものの用途は断定できない（Ackerman 1984; Collins 1962: 9–12; McGhee 1976: 206–207; Oswalt 1957）。

オクヴィク文化の遺物は他のどの文化期よりも多く装飾されており，儀礼用具のみならず，実用の道具にもあまねく刻線が施されている。人物像も多く，オクヴィク遺跡だけでも45個が発見されている。人物像の顔は独特な形をし，口が小さく，顎がややと

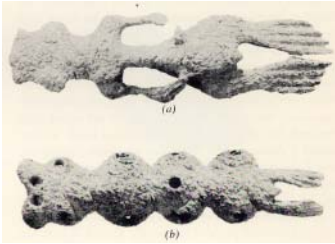

図11　イピウタク：アザラシ人間（Taylor/Swinton 1967: 5）

図12　イピウタク：（Rainey 1959: 7）

図13　オールド・ベーリング・シー（Wardwell 1986: 83）

図14　オールド・ベーリング・シー：遮光器（Ackerman 1984: 111）

図15　オールド・ベーリング・シー：遮光器（Wardwell 1986: 85）

がっている面長で，頬骨のはった「うりざね」顔が多く，他の時期とは違って表情まで丁寧に表現され，眉まで描かれている（図16）。一方，胴体部は簡略化され，一部分しか表現されていないものが多い（図17）。とくに女性を現わしている彫刻が多く，乳房，性器などが誇張されている，いわゆるビーナス像（図18）が多い。オクヴィク文化のマドンナと呼ばれる女性像は，胸部にある，折れた四つ足の跡と思われる突起から判断して，幼獣を抱いていたと解釈されている（図19）（Collins 1969/70: 126）。その他に，両性具有者を表現している人物像があり，民族誌に伝わっている伝説や神話の内容がパレオ・エスキモー文化の時代までさかのぼるものであることをほのめかしている。人物像が多いのに対し，動物を表現したものが少ないのは，他の文化とは対象的である。また，数少ない動物像の仕上げは人物像に比べて粗雑であり，イピウタク文化のような透かし彫りはほとんどない。

イピウタク文化とは異なり，オクヴィク文化期の副葬品は特別にこしらえたものが少なく，日常の実用品が死者に副えられた場合が多かったとされる（Collins 1959, 1962: 3–9, 1969/70, 1973: 3–4, Giddings 1961: 172; Ray 1981: 76）。

一方，プヌク文化の装飾は簡潔であり，器物の表面は，空間を埋めつくす装飾と異なり，計画的に空間に装飾要素を配置し，左右対象の幾何学的な装飾（図20）という傾向がある。プヌク文化の装飾は規定された正確さを重視した幾何学的なスタイルになる。人物像や動物像は稀である。アラスカ本土ではプヌク文化のスタイルがイヌイト文化伝統に影響を及ぼしたと考えられている（Collins 1973: 7–9; McGhee 1976: 207–208）。

上記のプヌク文化に時期的に並行し，ベーリング海峡周辺の北米大陸とアジア大陸の両側の沿岸地帯ではビルニーク（Birnirk，バーナークともいう：

図16　オクヴィク：人物像
（Collins 1973: 5）
右図17　オクヴィク：女性像
（Collins 1973: 9）

図18　オクヴィク：女性像
（Collins 1973: 6）
右図19　オクヴィク：女性像
（Rainey 1959: 9）

図20　プヌク（Wardwell 1986: 107）

1200～600年前）文化の遺跡が分布している。ビルニーク文化では装飾されているものが少なく，装飾されているものは主に実用品であり，非日常用品と解釈されるものには，装飾されたものは稀であるが，この現象は装飾が施されなくなったことを反映しているのか，あるいは装飾の対象が衣服など，保存されにくい有機質のものに変わったことを意味しているのかについては，現段階では断言できない（Collins 1962: 3; 1973: 9–10; McGhee 1976: 208）。

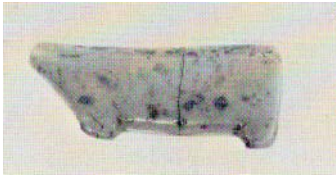

図21　コニアグ：クマ（Collins 1973: 33）

図22　コニアグ：仮面（Collins 1973: 37）

図23　コニアグ：礫（Clark 1984: 147）

3.1.3　南西アラスカ

アラスカ半島より南の地域に，これまで述べてきた北アラスカのパレオ・エスキモー文化とは性質がやや異なる文化がある。それは，南に栄えていた北西海岸インディアン文化からも影響をうけているからだと推定されている。

およそ2000年前の遺跡から，アイボリー製の人間の顔やアザラシの頭の彫刻品が出土しており，その他にクマ（ヒグマと推定される　図21）などの動物像やミニチュア仮面（図22）も知られている。当地では牙がアイボリーの原材料となるセイウチはほとんど棲息しないので，アイボリーの彫刻品はごく少ない。写実的な文様が刻まれている礫（図23）もある。

全体的にこの地域では装飾された遺物は少ないが，より北の本格的な寒冷環境とは異なり，木材や植物繊維が豊富にとれる当地では，パレオ・エスキモー文化期にも木の彫刻，織物，カゴ細工という，保存されにくい有機質器物はあったと思われる（Clark 1984; Collins 1962: 19–20; 1973: 13–14; Workman et al. 1980: 388, 395）。

3.2　東部極北圏

北西カナダを流れるマッケンジー川以東からグリーンランドまで広がる東部極北圏では，西部極北圏のような，多くの文化伝統圏を設定する必要はない。それぞれの文化のローカルな様相はあったが，大局的にとらえた場合，時代ごとの文化伝統はほぼ全域にわたって類似性が認められる。

東部極北圏の初期パレオ・エスキモー文化であるインデペンデンスⅠ／Ⅱ文化とプレ・ドーセット／ドーセット文化は西部極北圏とは区別される独自の文化伝統に属する，と解釈する（スチュアート 1985: 732–733）ことは，前述のミトコンドリアDNA研究によって左証されている。

インデペンデンスⅠ文化／インデペンデンスⅡ文化

グリーンランドの北西部を中心に分布するインデペンデンスⅠ文化（4600～3700年前）とインデペンデンスⅡ文化（3200～2500年前）は，ほぼ並行した時期に存在していたプレ・ドーセット文化／ドーセット文化伝統とは異なる文化的な特徴を有しており（マッギー 1982: 37～46），装飾された遺物はインデペンデンスの両文化期ともに現在まで，確認されていない。

プレ・ドーセット文化

極北カナダとグリーンランドに分布していたプレ・ドーセット文化（3800～2800年前）では，見つかっている竪穴住居は少なく生活ゴミが堆積するミッデン（生活ゴミの捨て場）も見つかっていないので，有機質の遺物は保存されることがまれである。そのためか，プレ・ドーセット文化に属する装飾に関する資料はきわめて少ない。その中，注目されるのが小型（高さ３～５㎝）の仮面（図24）である。後述のドーセット文化のもの（図27，28参照）に影響を及ぼしたかどうかについて，両文化の間に交渉があったかどうかを考証する必要がある（Martijn 1964: 550; 1968: 7–8; Maxwell 1984: 362; McGhee 1974/75:133–146, 1976: 204）。

図24　プレドーセット：仮面（Helmer 1987: 188）

図25　ドーセット：人形（Carpenter 1973: 112）

ドーセット文化

プレ・ドーセット文化までの東部極北圏の文化の様子とは対照的に，ドーセット文化（2800～1000年前）は残っている装飾品の量が多く，制作技法も以前より巧みになっている。装飾された有機質遺物が残っているのは，竪穴住居の出現と冬の半定住生活にともなうミッデンの堆積やその他の保存条件とも

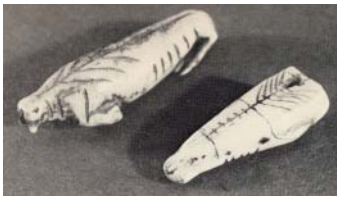
図26　ドーセット：アザラシ（Taylor/Swinton 1967: 9）

関係していると思われるが，これが原因で量が多くなっているのか，ドーセット文化期に入って装飾品の絶対量が増えているのかは不明である。

有機質遺物は時代が下がるにつれて増える傾向があり，人物像（図25）が多く，遺跡によっては装飾品の50%を占める場合もある。動物像（図26）も多く，やや写実的に描写されている。頭部だけではなく，体が全体的に表現されているのは西部極北圏や後続のチューレ文化の彫刻と違う特徴である。丸彫りの彫刻は小型（10㎝程度未満）であるにもかかわらず，重量感がある（図27）。優美なミニチュア仮面（図28）とは趣味を異にするグロテスクな仮面（図30）がドーセット文化の精神生活を垣間見せている，と感じ取れる。

日常什器や道具には装飾品が比較的少ないが，櫛（図29）などは知られている。儀礼に，あるいはシャーマンが使ったと思われるものが大半を占めている。多くの装飾遺物には吊し孔があいており，民族誌事例を参考にペンダント，あるいは衣服に縫いつけられた護符であると，推定されている。

一本のアイボリーや木に多数の人の顔をあらゆる角度から刻みこんだ多顔彫刻（Collins 1974/74: 56）もドーセット文化独特なものである（図31）。人物像の丸彫り彫刻の髪型は頭のうしろに束ねたかっこう（図32）であり，後続のチューレ文化の頭上に髷（まげ）を結ったヘアー・スタイル（図54）とは異なる。仮面の口の周りや頬に入れ墨をあらわしていると推定される刻線がある（図27参照）。人形の場合，腕や脚はたいがい念入りに表現され，裸身で性器も示されているので，性別が男性（図25），あるいは女性（図33）であることがわかる。

西部極北圏のイピウタク文化などに共通しているものとして，ドーセット文化でも人間の頭とアザラシの胴体の「アザラシ人間」（図34）や，カリブーの蹄の彫刻，唇と歯のアイボリーの彫刻（図35），骨

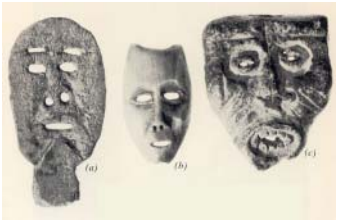

図27　ドーセット：仮面
（Taylor/Swinton 1967: 5）

図28　ドーセット：仮面
（Wright 1999: 1016）

図29　ドーセット：櫛
（Carpenter 1973: 108）

図30　ドーセット：仮面
（Carpenter 1973: 125）

格を表わす「レントゲン・モチーフ」(skeletal motif)のホッキョクグマなどが知られている（図36)。東部極北圏と西部極北圏の２つの地域は数千キロメートル離れているので，これらの類似点は接触や伝播によるものなのか，並行現象なのかは不明である(Taylor & Swinton 1967: 42)。

図31　ドーセット：多顔彫刻
(Taylor/Swinton 1967: 5)

ドーセット文化の装飾モチーフは，直線の刻線が多く，オールド・ベーリング・シー文化などにみられる曲線と，同心円や目玉文様などの要素の組み合わせとは対照的である。服装はときに表現されている（図37，38）ので，当時の衣服をある程度知ることができる。動物像の多くは，骨格を強調するレントゲン・モチーフで象られている（図36参照）(Taylor & Swinton 1967)。

互いに遠く離れている遺跡からも，人間の顔の表情やホッキョクグマなどのように同じ技法とスタイルの装飾遺物が検出されているので，ドーセット社会には広範囲にわた

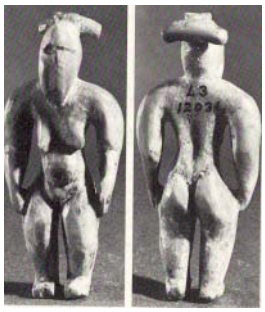

図32　ドーセット：髪型
(Fitzhugh 1984: 534)

図33　ドーセット：人物
(Collins 1974/75: 58)

図34　ドーセット：アザラシ男
(Carpenter 1973: 107)

図35　ドーセット：シャーマンの歯
(Carpenter 1973: 79)

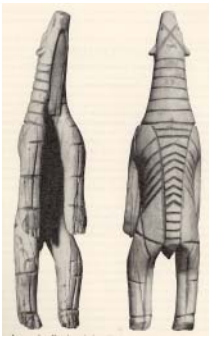

図36　ドーセット：クマ
(Larsen 1969/70: 25)

図37　ドーセット：服（Moberg　他 2001: 54)

図38　チューレ：服（Hessel 1998: 19)

図39　ドーセット：クマ性交
（Carpenter 1973: 112）

図40　ドーセット：人物
（Carpenter 1973: 115）

図41　ドーセット：人物
（Carpenter 1973: 115）

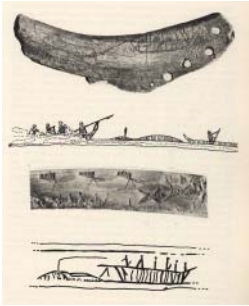

図42　チューレ：線画
（McCartney 1980: 523）

図43　チューレ：線画
（McGhee 1978: 87）

図44　チューレ：儀礼具
（Hessel 1998: 17）

るコミュニケーション網があったと推定される。

そのほかに，入れ墨（図27参照）を彷彿とさせる文様，ホッキョクグマとの性交（図39）や子どもを肩車する男性（図40，41）の躍動感あふれる彫刻は，ほかの極北地帯の文化にない，ドーセット文化独特な雰囲気を醸し出している（Collins 1962: 24–26; Harp 1969/70; Helmer 1987; Martijn 1964: 551, 1967: 8; Maxwell 1984: 366; McGhee 1976: 206; Ray 1977: 6; Taylor & Swinton 1967）。

チューレ文化

チューレ文化は1000年前ころ，北西部アラスカにおいて出現し，100年ほどの間にチュコト半島からグリーンランドまでの全域にわたって，それまでの文化に取って代わって普及した（マッギー 1982: 80）。パレオ・エスキモー文化とは異なる遺伝集団であり，現代のイヌイトの祖先はチューレ文化の担い手であり，現代のイヌイト文化の基礎はチューレ文化的な特徴に由来している（マッギー 1982: 91–93；Gilbert et al. 2008）。

チューレ文化では装飾のスタイルも技法もそれまでの東部極北圏の特徴と大きく変わり，当時の生活や活動を描写する，写実的な二次元の線画を描いたものがはじめて認め

られる（図42，43）。やや粗い刻線だけであるが，キャンプの様子，狩猟や捕鯨，ウミアックとカヤック，または動物がさまざまに描かれている。

セイウチを人面と合わせた彫刻（図44）は狩猟儀礼に関するものかどうかは断定できないが，民族誌に記録されているシャーマンと動物の関係（Merkur 1985: 227など；1991: 73–77）を表わしている可能性がある。狩猟の場面をより具体的に表現しているのは，ホッキョクグマと思われる，レントゲン・モチーフの動物を仕留めることを表現している彫刻（図45）である。民族誌とのつながりが確実なのが，サイコロ・ゲームの駒に使われる人面水鳥の彫刻（図46）である。

人物像は以前のドーセット文化とは違い，顔に表情はなく，多くの場合に口も目も描かれていないものが目立つ（図47）。脚は荒彫りのまま，腕にいたってはほとんど表現されておらず，西部極北圏のパレオ・エスキモー文化のように，肩のところにわずかな突起があるだけである（図48）のものが多い中，顔も首飾りも下着のパンツもブーツもていねいに表現されているまれな例もある。

ドーセット文化期に比べて，チューレ文化期では入れ墨を想起させる模様の仮面はないが，北部グリーンランドで発見された女性ミイラは全員，顔に入れ墨を施している（図49）ので，入れ墨風習は一般的であったと考えてよいだろう。また，その理由はわからないが，ブーツを表現したものが比較的に多いようにみうけられる（図50）（Collins 1962: 3, 1973: 10; Giddings 1973: 73–76; Manning 1951; Martijn 1964: 554; Maxwell 1983; McGhee 1976: 208, 1984; Schlederman 1975）。

3.3　通文化的な要素

東西１万キロメートル，南北数千キロメートルに広がる極北地帯には，考古学者によって20あまりの

図45　ドーセット：クマ殺し
（Carpenter 1973: 121）

図46　チューレ：人面水鳥
（Hessel 1998: 18）

図47　チューレ：人物像
（Carpenter 1973: 130）

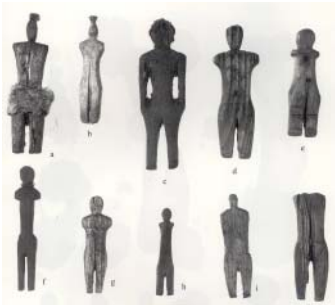

図48　チューレ：人物像
（Schlederman/McCullough 2003: 183）

文化――ここでは，考古学的な文化は限定された時空間において物質的な特徴が近似する現象をいい，人類学でいう文化と区別する――が設定されている。さらに，冒頭で述べたように極北地帯の住民は２つ（Gilbert et al. 2008），あるいは３つ（Rasmussen et al. 2010）の遺伝集団が交代したようであるので，極北地帯で知られている装飾モチーフが時空間にわたって継承されたとは考えにくい。類似するモチーフは，共通した経済基盤――寒冷地での採集・狩猟・漁撈――と環境的な条件を基盤に形成される精神（世界観）を反映する，並行現象であると考える。その解釈では，時代と地域の相違が理解されやすい。つまり，時空間的にかけ離れている西部極北圏のノートン文化と，東部極北圏のチューレ文化で知られている，腕はなく，顔が表現されない人物像（図04，47参照）やレントゲン・モチーフ（図09，36参照）は両集団の間の接触や交渉の結果ではなく，並行現象と理解されるのである。

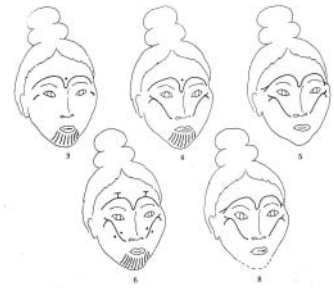

図49　チューレ：入れ墨
（Kromann 他 1989: 171）

図50　チューレ：人物像
（Carpenter 1973: 127）

図51　ミイラ（Zimmerman 1980: 110）

入れ墨

パレオ・エスキモー文化に入れ墨の風習があったことを示す具体的な資料として，セント・ローレンス島で発見された1600年前の女性ミイラの腕の入れ墨（図51）と，グリーンランドで発見された500年前のチューレ文化期に由来する女性ミイラ５体の顔の入れ墨がある。グリーンランドの事例では，こめかみから目の上を通り眉間に達する幅数㎜の線と，頬を伝って鼻翼までの線の入れ墨が彫ってある。こめかみや頬の線の先端は二又にわかれ，Ｙ字型文になっている（図49，54参照）（Kromann et al 1989: 171；Zimmerman 1980: 118–120）。この模様はチューレ文化の銛頭などの器物にも知られているモチーフの類似性が，前述したように，装飾には抽象的，観念的な意味合いが込められていることを傍証するものであろう。人物像などの入れ墨を思わせる文様は各文化期にある（図02，24，27参照）ので，入れ墨風習は数千年前にまでさかのぼるものであると推測できる。

服装

服装の装飾に関しては，具体的な資料が保存されるのは稀であるが，具体的な資料としては，グリーンランドで発見されたチューレ文化期のミイラの服装がある。女性が身につけていた短パンツやアノラックはアザラシの毛皮や鳥の羽を使って模様合わせをしていたことがわかる。いくつかの色のアザラシの毛皮を裁断し縫い合わせてつくったズボン，あるいはアビ，ガン，ウ，ケワタガモやマガモの羽毛をつかって作った晴着が報告されている（Moller 1989）（図52，53）。考古学的資料にも，民族誌で記録されているように，集団によって少しずつちがった衣服をつくる習慣，あるいは仕事着と晴着の使い分けがおこなわれていたとも考えられる（バーチ 1991: 60）。東部極北圏パレオ・エスキモー文化のドーセット文化期に由来する人物像の高い襟の上着は一種の装飾ではないかと思われる（図37参照）。そのほかに，人物像の胴体部に刻まれている文様は装飾服装をあらわしている蓋然性が高い（Taylor & Swinton 1967: 37 Fig.6）。西部極北圏のパレオ・エスキモー文化遺跡で見つかっている人物像は裸身であり，服装に関する情報がない。

図52　チューレ：服
（Issenman 1997: 21）

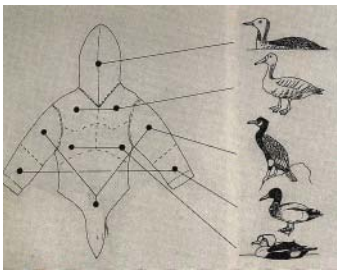

図53　チューレ：服（Moller 1984: 32）

髪型

髪型が表現されているのは東部極北圏のドーセット文化とチューレ文化の人物像だけである。ドーセット文化期には，頭の後方に髪を束ねた女性像がグリーンランドで発見されている（図32参照）。一方，チューレ文化期になると，頭の上に髷（まげ）を結っていたことが人物像やグリーンランド発見のミイラによって明かになっている（図54）。この髪型は東部極北圏のグリーンランドでは最近まで引きつがれている（Kleivan 1984: 611）。

図54　チューレ：入れ墨
（Kromann 他 1989: 171）

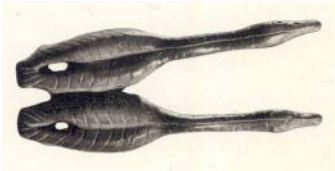

図55　ドーセット：装飾品
（Carpenter 1973: 85）

装身具

装飾されている遺物の多くは孔があいているが，それは首などに吊すための孔か，もしくは衣服に縫いつけるための孔のどちらかであろう（図55）。民族誌では，首に吊すペンダントも，衣服に縫いつける護符も同じような孔があいているので，ペンダントになるかどうかは判断がつかない。ペンダントや衣服に縫いつけるものは，装飾のためというよりも，儀礼的な役割をもっていた（Balikci 1970: 201）と考えられる。

ラブレット

ラブレットは西部極北圏ではノートン文化期の段階から知られている（図03）。黒玉，アイボリーや骨でつくられたラブレットの大きさも装飾も時代によって違っている。しかし，チューレ文化以前の段階ではラブレットは西部極北圏にしか発見されていないので，ラブレットは東部極北圏の初期パレオ・エスキモー文化にはなく，チューレ文化の東進にともなってアラスカから伝播した新しい風習であった可能性を考慮する必要がある（Clark 1984: Fig.6; Dumond 1984: Fig. 9; Giddings 1961: Fig.9, 1973: 190）。

3.4 小結

4500年にわたる極北地帯のイヌイト文化伝統にみる装飾は地域や時代によって多種多様であると同時に，地域や時代を超えた共通性も認められる。それは，イヌイトの民族誌に記録されている基礎的な世界観がパレオ・エスキモー文化にも共有されていたためと推量できるのではないだろうか。民族誌に記録されている世界観とは一言で説明できるものではないが，その特徴を簡単にまとめれば，イヌイト社会では人間と動物（「獲物」）は相互依存関係にある。動物はそれぞれの「世界」にいるとき，姿形もなすことも人間と同じであり，同じような生活しているが，人間の「世界」に現われたとき，毛皮，食料になる肉，道具の材料になる角などを身につけて運んでくる。人間の「世界」へ来てはまた自分の「世界」に戻らなければならないが，自分の力では戻れない。

そこで，動物が自分の「世界」へ無事に戻るためには，人間の手によって肉体から魂を解放してもらわなければならないが，解放してもらう見返りに，人間に毛皮や肉を与えるのである。つまり，毛皮や肉などの手土産を携えて人間の「世界」へ現われ，正しい儀礼に則（のっと）って自分の「世界」へ確実に戻してくれる人間を選び，自らを獲らせるのである。

イヌイトの世界観では，万物の魂の数は開闢以来決まっており，一つの魂が循環できなくなれば，その魂，ひいてはその存在そのものは永久に世の中から消滅するとされている（スチュアート 1991; バーチ 1991: 141–172）。この世界観がいつの時代までさかのぼるかについて，確証はないが，「獲物」となる動物を象っている彫刻品 —— とりわけレントゲン・モチーフや獲物を仕留める彫刻 —— に現われていると考える。

イヌイト文化伝統をめぐるもう一つの課題は，時空間的に離れている地域間のモチーフには共通性が認められることである。西部極北圏のイピウタク文化と東部極北圏のドーセット文化が地理的に数千キロメートルも離れており，両文化の間に交渉の痕跡がないのに，「アザラシ人間」や「人面水鳥」などを表わした彫刻が知られていることを説明するには，世界観の共有のためか，それとも偶然の並行現象なのか，さらに追究する必要がある。

確信はもてないが，イピウタク文化期から知られている「アザラシ人間」も，民族誌に記録されている女神のセドナ伝説（Sedna, Nuliajuk とも：スチュアート 1991: 123–125；Holtved 1966/67）も，太古からの世界観と関連する可能性がある。

また，入れ墨を表現していると解釈される仮面，あるいは確認されているミイラの事例においても，時空間を超えた交渉を考える必要は必ずしもない。というのは，入れ墨は北米大陸全域に知られている身体装飾の一つである（Schildkrout 2004）からで，イヌイト特有のことであるとはいえない。

ところが，以上の推測と矛盾するのは，極北地帯で3つの異なる遺伝集団が西部極北地帯に入り替わり交代したことである。遺伝集団は文化集団と一対一関係ではないが，集団間の間にはどのような交渉があったか，従来の考古学的な研究で再検討が不可欠である。

手足などの胴体が写実的に表現されているドーセット文化の人物像とは違った，チューレ文化が西部極北圏から広がって普及した簡略化された人物像の存在を鑑みて，チューレ文化以前において東部極北圏と西部極北圏では，文化伝統が異なっていたという印象がいよいよ強くなるのである。

捕鯨船の乗組員や商人との交易，そして時代が下がり市場に出す「美術品」が作られるまで，イヌイト文化の装飾には経済的な意図は込められていなかったと思われる。副葬品の文様は霊との交感を容易にし，狩猟道具の文様が狩猟の成功と豊猟という儀礼的な意味をもっていたことなどの機能を付与したのであろう。たとえば，人の顔を彫り込んでいるアザラシ猟用の銛頭（図56）はその推測を裏付けるものであろう。

ただし，すべての装飾が何らかの機能的な意義をもつと解釈し，イヌイト文化伝統における審美的な意識を否定するような，一方的な機能主義的な解釈も極端である。これまでとり上げてきた装飾品には，美的な感覚もあったと，現代の私たちの目に映る物が少なくない。それは，次に論じるように，現代のイヌイト・アートに引きつがれていることでも，示唆されるのである。

図56　ドーセット：銛頭
（Collins 1967: 78）

4 現代イヌイト・アートに反映される伝統的な装飾モチーフ

これまで論じてきた装飾品は自家消費，すなわち外部への流通を意識した制作ではなかったという前提だったが，交易を目的とする制作は18世紀にはじまった（Hessel 1998: 21–28）。鉄砲やたばこ，紅茶，テントの材料となる帆布などの欧米工業製品を入手する交易品として，毛皮のほかに装飾品，つまり欧米人の好みに合うような物を作るようになった（図57）。世界観と密接な関係をもっていた装飾は次第に世俗化していったのである。19世紀に頻繁に極北地帯に出入りするようになる捕鯨船の乗組員を相手に，ヨーロッパで珍重されるアイボリーのパイプ（図58），クリベッジ（トランプの一種：図59）の点数盤などは，20世紀後半に確立する現代イヌイト・アートの先駆的なものであった。

図57　現代の彫刻
（作者不明　Hessel 1998: 22）

1940年代後半はイヌイトの「手工芸品」が「美術品」と評価され，現代イヌイト・アートとなるのだが，その紹介に尽力したのがジェイムズ・ヒューストン（James Houston）（大村 2009，ヒューストン 1999）である。現代イヌイト・アートの確立の詳細を同章の小林にゆずり，ここでは，古代のイヌイト文化伝統の装飾モチーフが現代に引きつがれているいくつかの事例を簡単に紹介する。

図58　現代の彫刻
（作者不明　Ray 1977: 225）

レントゲン・モチーフ（図９，36と60），仮面（図24と61），人物像（図25と62），多顔彫刻（図31と63），性交（図39と64），線画（図42，43と65）など，多数の事例がある。不思議に思われるのは，ドーセット文化期では，子どもと大人をモチーフにした作品では，大人は男性であるのに対して，現代のイヌイト・アートでは，大人は女性（たとえば図40と66）の作品になっている。

図59　現代のクリベッジ盤
（Angokwazhuk 作　Wales, Alaska 20世紀初頭　Ray 1984: 301）

本人に確認した訳ではないが，現代のイヌイト作家は，パレオ・エスキモー文化，ネオ・エスキモー文化，西部極北圏，東部極北圏を問わず，創造的な刺戟（インスピレーション）になるモチーフを作品に動員していると思われる。それは，過去の作品と現代の作品には，

図60　現代のレントゲン・モチーフ
（William Noah 1978年 作　民博所蔵 H0115324）

図61　現代の仮面
（Jimmy Taipanak 作
Kardosh 2003: 101）

図62　現代の人物
（John Tiktak 作　Lalonde・
Ribkoff 2005: 50）

図63　現代の多顔彫刻
（Tuna Iquliq 作 北海道立北方民族博物館 2006: 13）

図64　現代の性交モチーフの彫刻
（Cecilie Kleist 作　Haagen 2003: 77）

図65　現代の線画（Davidee Italu 作
Lalonde/Ribkoff 2005: 39）

図66　現代の子どもと大人のモチーフの彫刻
（Adamie Anautak 1992年作　民博所蔵 H0212683）

多くの類似点――モチーフ，表現など――がある。おびただしい量のイヌイト・アートをとり上げている美術書，博物館・美術館展示，ギャラリーでは，過去の装飾モチーフを目にしたり，手で触れたりする機会が多いことが，過去と現代をつなげている大きな要因であろう。過去のモチーフを丸写し『複製』する場合もあるが，多くは制作者の感覚を加味して，現代的にアレンジしている。代々伝わっている情報を参考にするのはいうまでもないことだが，先祖からではなく，遠く離れている地域から，あるいは装飾に関する夥多の研究成果やイヌイト・アートの美術書もインスピレーションの宝庫であろう。

注

1）ここでいうアイボリーは主にセイウチの牙である。

文　献

Ackerman, Robert

1984 Prehistory of the Asian Eskimo Zone. In David Damas（ed.）*Handbook of North American Indians* 5（Arctic）: 106–118. Washington D.C.: Smithsonian Institution.

Anderson, Douglas

1984 Prehistory of North Alaska. In David Damas（ed.）*Handbook of North American Indians* 5（Arctic）: 80–93. Washington D.C.: Smithsonian Institution.

Balikci, Asen

1970 *The Netsilik Eskimo*. New York: The Natural History Press.

Bandi, Hans-Georg

1969 *Eskimo Prehistory*. Fairbanks: University of Alaska Press.

バーチ，アーネスト

1991 『エスキモーの民族誌――図説・極北に生きる人びとの歴史・生活・文化』（スチュアート　ヘンリ訳）東京：原書房。

Carpenter, Edmund

1973 *Eskimo Realities.* Holt: Rinehart and Winston

Clark, Donald

1984 Prehistory of the Pacific Eskimo Region. In David Damas（ed.）*Handbook of North American Indians* 5（Arctic）: 136–148. Washington D.C.: Smithsonian Institution.

Collins, Henry

1929 Prehistoric Art of the Alaskan Eskimo. *Smithsonian Miscellaneous Collections* Vol. 81（14）. Washington D.C.: Smithsonian Institution.

1951 The Origin and Antiquity of the Eskimo. *Annual Report of the Smithsonian Institution* 1950: 423–468. Washington D.C.: Smithsonian Institution.

1959 An Okvik Artifact from Southwest Alaska and Stylistic Resemblances between Early Eskimo and Paleolithic Art. *Polar Notes* 1:13–27. Hanover, NH: Dartmouth College Library.

1962 Bering Strait to Greenland. In John Campbell（ed.）*Prehistoric Cultural Relations between the Arctic and Temperate Zones of North America*, Technical Paper 11:126–139. Calgary, Alberta: Arctic Institute of North America.

1967 Diamond Jenness and archaeology. *The Beaver.* Autumn. pp.78–79.

1969/70 The Okvik Figurine: Madonna or Bear Mother?, *Folk* 11–12:125–132. Dansk Etnografisk Forening.

1973 Eskimo Art. In Henry Collins et al.（eds.）*The Far North: 2000 Years of American and Indian Art*, pp.1–23. Washington D.C.: National Gallery of Art.

1974/75 Additional Examples of Early Eskimo Art. *Folk* 16–17:55–62. Dansk Etnografisk Forening.

Damas, David（ed.）

1984 *Handbook of North American Indians* 5（Arctic）. Washington D.C.: Smithsonian Institution.

デュモン，ドン

1982 『ツンドラの古代人』（小谷凱宣訳）東京：学生社。

Dumond, Don
1984 Prehistory summary. In David Damas (ed.) *Handbook of North American Indians* 5 (Arctic): 72–79. Washington D.C.: Smithsonian Institution.
Fitzhugh, William
1984 Paleo-Eskimo Cultures of Greenland. In David Damas (ed.) *Handbook of North American Indians* 5 (Arctic): 528–539. Washington D.C.: Smithsonian Institution.
Giddings, James
1961 Cultural Continuities of Eskimos. *American Antiquity* 27 (2): 155–173. Society for American Archaeology.
1964 *The Archaeology of Cape Denbigh*. Rhode Island: Brown University Press.
1973 *Ancient Men of the Arctic*. New York: Alfred A. Knopf.
Gilbert, M.T et al.
2008 Paleo-Eskimo mtDNA Genome Reveals Matrilineal Discontinuity in Greenland. *Science* 320(5884): 1787–1789.
Haagen, Birte
2003 *Aron Kleist and Cecilie Kleist: Two Greenlandic Artists and their Magic World.* Virum: Tinok.
Harp, Elmer
1969/70 Late Dorset Eskimo Art from Newfoundland, *Folk* 11–12:109–124. Dansk Etnografisk Forening.
Helmer, June
1987 A Face from the Past: An Early Pre-Dorset Ivory Maskette from Devon Island, N.W.T., *Etudes/Inuit/Studies* 10(1/2): 179–202. Québec: Laval University, Inuksiutiit Katimajiit Association.
Hessel, Ingo
1998 *Inuit Art, an Introduction*. Vancouver & Toronto: Douglas & McIntyre.
ヒューストン，ジェイムズ（小林正佳訳）
1999 『北極で暮らした日々 ── イヌイット美術を世界に紹介した男の回想』東京：どうぶつ社。
北海道立北方民族博物館編
2006 『イヌイト・アートの世界 ── 光洋マテリカ寄贈資料展』（平成17年度企画展図録） 網走：北海道立北方民族博物館。
Holtved, Erik
1966/67 The Eskimo Myth about the Sea-woman: A Folkloristic Sketch, *Folk* 8–9: 145–154, Dansk Etnografisk Forening.
Hughes, Charles
1984 Saint Lawrence Island Eskimo. In David Damas (ed.) *Handbook of North American Indians* 5 (Arctic): 262–277. Washington D.C.: Smithsonian Institution.
Issenman, Betty
1997 *Sinews of Survival: the Living Legacy of Inuit Clothing.* Vancouver: UBC Press.
Jordan, Richard
1984 Neo-Eskimo prehistory of Greenland. In David Damas (ed.) *Handbook of North American Indians* 5 (Arctic): 540–548. Washington D.C.: Smithsonian Institution.

Kardosh, Robert
2003 *Vision and form: the Norman Zepp: Judith Varga Collection of Inuit Art*. Vancouver: Marion Scott Gallery.
岸上伸啓
2005 『イヌイット――「極北の狩猟民」のいま』東京：中央公論新社。
2007 『カナダ・イヌイットの食文化と社会変化』東京：世界思想社。
Kleivan, Inge
1984 West Greenland before 1950. In David Damas（ed.）*Handbook of North American Indians* 5（Arctic）: 595–621. Washington D.C.: Smithsonian Institution.
Kromann, N.P. et al.
1989 The Tattooings of the Qilakitsoq Eskimo Mummies. In J. Hansen and H. Gullov（eds.）*The Mummies from Qilakitsoq: Eskimos in the 15th century*, *Meddelelser om Gronland, Man & Society* 12, pp.168–171. Copenhagen: Nyt Gyldendalske Boghandel Nordisk Forlag AS.
Lalonde, Christine; Natalie Ribkoff
2005 ItuKiagatta: Inuit Sculpture from the Collection of the TD Bank Financial Group. Ottawa: National Gallery of Canada.
Lalonde, Christine and Leslie Ryan
2009 *Uuturautiit: Cape Dorset Celebrates 50 years of Print Making*. Ottawa: National Gallery of Canada.
Lambert, David and Leon Huynen
2010 Face of the Past Reconstructed. *Nature* 463: 739–740.
Lantis, Margaret
1947 Alaskan Eskimo Ceremonialism. *Monographs of the American Ethnological Society* 11（1947）: 94. New York: J. J. Augustin Publisher.
Larsen, Helge
1969/70 Some Examples of Bear Cult among the Eskimo and other Northern Peoples, *Folk* 11–12: 27–42, Dansk Etnografisk Forening
Larsen, H., F. Rainey
1948 Ipiutak and the Arctic Whale Hunting Culture. *Anthropological Papers of the American Museum of Natural History* 42. New York: American Museum of Natural History.
Manning, T.H.
1951 A Mixed Cape Dorset-Thule Site on Smith Island. *East Hudson Bay National Museum of Canada Bulletin* 123: 64–71. Department of Northern Affairs and National Resources.
Martijn, Charles
1964 Canadian Eskimo Carving in Historical Perspective. *Anthropos* 59: 545–596. Internationale Zeitschrift fur Volker-und Sprachenkunde.
1967 A Retrospective Glance at Canadian Eskimo Carving. *The Beaver*, Autumn: 4–19.
Maxwell, Moreau
1983 A Contemporary Ethnography from the Thule Period. *Arctic Anthropology* 20(1): 79–88. Madison: University of Wisconsin.

1984 Pre-Dorset and Dorset Prehistory of Canada. In D. Damas（ed.）*Handbook of North American Indians* 5（Arctic）: 359–368. Washington D.C.: Smithsonian Institution.

McCartney, Allen

1980 The Nature of Thule Eskimo Whale Use. *Arctic* 33（3）: 517–541. Calgary: Arctic Institute of North America.

1988 Late Prehistoric Metal Use in the New World Arctic. *The late prehistoric development of Alaska's native people*, Aurora Series（4）: 57–81. Anchorage: Alaska Anthropological Association.

McCullough, Karen

1989 The Ruin Islanders: Early Thule Culture Pioneers in the Eastern High Arctic. *Archaeological Survey of Canada*（Mercury series）: 141. Hull: Canadian Museum of Civilization.

McGhee, Robert

1969/70 Speculations on Climatic Change and Thule Culture Development, *Folk* 11–12: 173–184, Dansk Etnografisk Forening.

1976 Differential Artistic Productivity in the Eskimo Cultural Tradition. *Current Anthropology* 17（2）: 203–220. Chicago: University of Chicago Press.

1978 *Canadian Arctic Prehistory.* National Museums of Canada.

1984 Thule Prehistory of Canada. In David Damas（ed.）*Handbook of North American Indians*, Vol. 5（Arctic）: pp. 369–376. Washington D.C.: Smithsonian Institution.

1989 *Ancient Canada*. Hull: Canadian Museum of Civilization.

マッギー，ロバート

1982 『ツンドラの考古学』（スチュアート ヘンリ訳）東京：雄山閣。

Merkur, Daniel

1985 *Becoming Half Hidden: Shamanism and Initiation among the Inuit*. Stockholm Studies in Comparative Religion 24, Stockholm: Almqvist & Wiksell International, Stockholm.

1991 *Powers Which We Do Not Know: The Gods and Spirits of the Inuit*, Moscow: University of Idaho Press.

Moller, Gerda

1989 Eskimo Clothing from Qilakitsoq. In J. Hansen and H. Gullov（eds.）*The Mummies from Qilakitsoq: Eskimos in the 15th Century*, *Meddelelser om Gronland, Man & Society* 12: 23–46. Copenhagen: Nyt Nordisk Forlag - Arnold Busck A/S.

大村敬一

2010 「生きることの歌：カナダ・イヌイットの版画の魅力」齋藤玲子ほか編『極北と森林の記憶　イヌイットと北西海岸インディアンの版画』pp. 18–64，京都：昭和堂。

Oswalt, Wendell

1957 New Collection of Old Bering Sea I Artifacts. *Anthropological Papers of University of Alaska* 5（2）: 91–96. Fairbanks: University of Alaska.

Rainey, Froelich

1959 The vanishing art of the Arctic. *Expedition* 1–2: 3–13. University Museum, University of Pennsylvania.

Rasmussen, Morten et al.
2010 Ancient Human Genome Sequence of an Extinct Palaeo-Eskimo. *Nature* 463: 757–762.
Ray, Dorothy
1977 *Eskimo Art: Tradition and Innovation in North Alaska*. Vancouver: J.J. Douglas Ltd.
1981 *Aleut and Eskimo Art: Tradition and Innovation in South Alaska.* Seattle: University of Washington Press.
1984 Bering Strait Eskimo, In David Damas (ed.) *Handbook of North American Indians* 5 (Arctic): 285–302. Washington D.C.: Smithsonian Institution.
Schildkrout, Enid
2004 Inscribing the Body. *Annual Review of Anthropology* 33 (1): 319–344.
Schledermann, Peter
1975 A Late Dorset Site on Axel Heiberg Island. *Arctic* 28 (4): 300. Calgary: Arctic Institute of North America.
Schledermann, Peter and Karen McCullough
2003 *Late Thule Culture Developments on the Central East Coast of Ellesmere Island*. Greenland: Danish Polar Center.
スチュアート　ヘンリ
1985 「極北小型石器文化の再検討 ── 東部極北圏エスキモー文化の起源によせて」『古代探叢』Ⅱ，pp.707–738，東京：早稲田大学出版部。
1991 「食料分配における男女の役割分担について ── ネツリック・イヌイット社会における獲物・分配・世界観」『社会人類学年報』17: 115–128，東京：弘文堂。
1993 「イヌイットか，エスキモーか ── 民族呼称の問題」『民族学研究』58–1: 85–88。
2000 「カナダ・イヌイト社会の分業と男女関係 ── ジェンダー今昔物語」川崎賢子，中村陽一編『アンペイド・ワークとは何か』pp.208–224，東京：藤原書店。
2009 「大地と近代世界システムのはざまに生きる ── カナダ・イヌイトの歴史と現代」国立民族学博物館編『自然のこえ　命のかたち』pp.76–78，京都：昭和堂。
Taylor, William and George Swinton
1967 Prehistoric Dorset Art. *The Beaver* (Autumn): 32–47. Ontario: Hudson's Bay Company.
Wardwell, Allen
1986 *Ancient Eskimo Ivories of the Bering Strait*. Vermont: Hudson Hills Press.
Workman, William, John Lobdell and Karen Workman
1980 Recent Archaeological Work in Kachemak Bay, Gulf of Alaska. *Arctic* 33 (3): 385–399. Calgary: Arctic Institute of North America.
Wright, James
1999 A History of the Native People of Canada 2 (1,000B.C.-A.D.500). *Archaeological Survey of Canada*, Mercury Series 152. Hull: Canadian Museum of Civilization.
Zimmerman, Michael
1980 Aleutian and Alaskan mummies. In Aidan and Eve Cockburn (eds.) *Mummies, Disease, and Ancient Cultures,* pp.118–134. Cambridge: Cambridge University Press.